東日本大震災復興支援イベント

STAND UP SUMMIT 2019

日　　時　2019年8月6日（火曜日）10:00－18:00

会　　場　東京ビッグサイト会議棟

主　　催　株式会社東京ビッグサイト TOKYO BIG SIGHT

共　　催　東京都／特定非営利活動法人次代の創造工房

併　　催　STAND UP FESTIVAL

U R L　www.bigsightmg.jp/sus2019/

後　　援　復興庁／岩手県／福島県／宮城県／アメリカ大使館／公益財団法人日本台湾交流協会／TOKYO FM／TOKYO MX／日本経済新聞社／岩手日報社／河北新報社／福島民報社／日本赤十字社／日本商工会議所／独立行政法人国際協力機構（JICA）

企画協力　アゼリーグループ／株式会社伊藤染工場／株式会社いわきスポーツクラブ／釜石市／Support Our Kids 実行委員会／三陸鉄道株式会社／GTFグレータートウキョウフェスティバル実行委員会／スマイルとうほくプロジェクト／高橋藍／一般社団法人たのしいことする。プロジェクト／TBSホールディングス／東北福祉大学／学校法人南光学園 東北高等学校／HABATAKI／ヒーローズエデュテイメント株式会社／藤岡奈穂子／一般社団法人ふらっとほーく／NPO法人ボランティアインフォ／株式会社マルト／宮城県タクシー協会　仙台地区総支部／武蔵野大学／RISK WATCH／綾里漁業協同組合／早稲田大学／早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

Twitter　@StandUpSummit

オフィシャルサポーター

UNDER ARMOUR　飯田電機工業株式会社　伊藤園　INTEX OSAKA インテックス大阪　グリーンコア
株式会社ケン&スタッフ　Coca-Cola BOTTLERS JAPAN INC.　SIMUL　SUNTORY　JR東日本
シミズオクト　東京メトロ　TOPPAN FORMS　はとバス　株式会社ビッグサイトサービス
HIBINO Hibino Media Technical　FUJITA KANKO　ブルボン　とんかつ まい泉　MIZUHO　三井不動産 MITSUI FUDOSAN
三菱食品　Murayama 株式会社ムラヤマ　ゆりかもめ YURIKAMOME　TWR りんかい線

STAND UP FESTIVAL

主　　催　株式会社東京ビッグサイト
共　　催　東京国際プロジェクションマッピングアワード実行委員会
特別協賛　株式会社IMAGICA GROUP
後　　援　江東区
特別協力　東京都港湾局
協　　力　有明エリアマネジメント連絡会
会　　期　2019年8月5日（月曜日）18：00－20：00
場　　所　東京ビッグサイト エントランスプラザ（会議棟前広場）



東日本大震災復興支援イベント

STAND UP SUMMIT Final STAND UP FESTIVAL 結果報告書

主催：株式会社東京ビッグサイト　共催：東京都／特定非営利活動法人次代の創造工房

震災から８年半を迎えて

STAND UP SUMMIT（スタンドアップサミット）は、
東日本大震災の復興に対する意識の風化防止と
次世代の育成を目的とし、
本年で6回目の開催を迎えました。

東日本大震災から8年半。
被災地の状況、人々の心境は大きく変化してきました。
そんな今だからこそ、改めて復興について考えること、
それが本イベントの目的です。

復興とはどんな状況を指し、何を意味するのか。
この問いに対する答えは、人それぞれ異なります。
自分なりの答えを持ち、未来に活かしていくために、
これからを担う３００名以上の学生たちが、
東北・東京・海外からつどい、
今一度“復興”について問い直し、議論しました。

また、前日には「夏祭り＝生きる力」をテーマに、
併催イベントSTAND UP FESTIVAL
（スタンドアップフェスティバル）を開催。
サミット参加学生による東北の郷土芸能、
合唱、ダンスの他、プロジェクションマッピングと
花火が有明の夏の夜を盛り上げました。








【 プログラム・目次 】

8月6日　STAND UP SUMMIT

第一部　復興セッション

開会式 [10:00] …… 3
復興セッション [10:10] …… 4

SESSION
01 三陸鉄道株式会社 …… 5
02 一般社団法人 ふらっとーほく …… 6
03 釜石市 …… 7
04 株式会社マルト …… 8
05 福島県 …… 9
06 株式会社伊藤染工場 …… 10
07 東北福祉大学 …… 11
08 早稲田大学 …… 12
09 いわきFC …… 13
10 スマイルとうほくプロジェクト …… 14
11 NPO法人ボランティアインフォ …… 15
12 宮城県タクシー協会 仙台地区総支部 …… 16
13 綾里漁業協同組合 …… 17
14 独立行政法人 国際協力機構（JICA東北） …… 18
15 TBSテレビ …… 19

ポスタープレゼンテーション [14:30] …… 20

第二部　ステージプログラム

復興ディスカッション [16:15] …… 21-22

復興への取組みパネル展 …… 23

8月5日　前日プログラム

前日ワークショップ [14:00] …… 27-28
STAND UP FESTIVAL [18:00] …… 29-30
広報活動 …… 31-32

東北へ想いを届けよう！

「東北へのエール!!」寄書きボード











STAND UP SUMMITとSTAND UP FESTIVAL の2日間を通して、３００名以上の参加学生と一般来場者の皆様が復興への想いと東北へのエールをボードに書き込みました。
このボードはイベント終了後にポスターとなり、岩手県の三陸鉄道の駅舎へ期間限定で掲出されています。
ラグビーW杯で多くの観光客が来訪する岩手県において、県外や海外の方々にも本イベントの意義やこれからの未来を担う若者たちの熱い想いをご覧頂くことで、今一度東北の復興について考えていただくことを願い、三陸鉄道様ご協力のもと実現した企画です。

開 会 式

主催者挨拶　石原 清次　株式会社東京ビッグサイト 代表取締役社長



このイベントは、「未来は自分たちで創っていく！」という強い意志のもと、東北、東京、そして海外から、次の時代を担う若い人たちがここ東京ビッグサイトに集い、復興のあり方や課題について考える、中高生・大学生を主役とした復興支援イベントであります。
これまで延べ1500名の学生さん達に、このイベントに参加していただいておりますが、今回のSUMMITにも、東北、東京、海外から約300名の中高生・大学生の皆さんに参加頂いております。
本イベントでの経験はもとより、これまで復興に係わる多くの人の活動を現地やニュースを通してご覧になってきたことを、これから先どういった形で自分たちの世代がつないでいくのか、復興をより推し進めるには何をすればいいのか、皆さんの中で大いに意見を交わしてほしいと思います。
このSUMMITで得られた経験が、参加した皆さんすべてにとって、未来への力強い新たな一歩を踏み出すきっかけとなることを切に願っております。

共催者挨拶　遠藤 雅彦　東京都 総務局長



この STAND UP SUMMIT は 6 回目の開催になりましたが、この間多くの皆様方が復興に関して議論を積み重ねたことが、少しずつですが被災三県の復興応援のお役に立てたのではないかと自負をしているところです。
2019年は、非常にエポックメイキングな年になると思っております。先だって、被災三県を久しぶりに訪れましたが、岩手釜石の鵜住居復興スタジアムでは、ラグビーのワールドカップがもうすぐ始まります。それから、福島のJヴィレッジは本格的な再開を迎えております。そして、来年の3月26日には、オリンピックの聖火リレーがJヴィレッジからスタートするということで、その準備に追われているところでした。被災三県を訪れ、復興のかたちは出来ている、随分変わった、いろいろな意味で時が経ったと思うことがありました。一方で、人が戻ってこない、福島の避難指示区域では、まだまだ時が止まったかのように町が動いていないとも思いました。そのようないろいろな感想を持ちながら帰ってきました。
皆様方が、 今日ここで一日議論していただくなかで、 皆様の心の中に芽生えていくものが、 心の復興、東北の復興を支えていくのだと思っております。

開会宣言　大場 さくら　宮城県石巻高等学校 1 年



2011年3月11日。8年前のあの日、私は小学1年生でした。大きな地震と津波が東北を襲い、約1万6千人の方々が命を失いました。私は大きな地震のあと、宮城県東松島市にある小学校で津波に襲われました。体育館のギャラリーにのぼり館内を見ると、津波はまるで洗濯機のように人々を飲み込んでいきました。館内から外を見ると、私の街は真っ黒な海に変わり果て、家や家族を失いました。
しかし、そんなとき私たちを支えてくれたのは、たくさんの繋がりでした。見ず知らずの人が、「大丈夫だよ」「がんばれ」と声をかけてくださったり、さまざまな国から支援物資が届いたり、毎日その日を生きることに精一杯だった私たちに、これからを生きる勇気を与えてくれました。震災で辛いことも悲しいこともいっぱいあったけれど、震災があったから生まれたたくさんの繋がりがあることも事実だと思います。
たくさんの人に支えられて、励まされて、今こうして皆さんと繋がっていることがその証です。
今年のテーマは、「私たちが繋ぐ未来」です。今ここにいる300人の想いが繋がれば、とても大きな力になると私は信じています。東北の未来、日本の未来、そして世界の未来を私たちの手で創っていきましょう。このSTAND UP SUMMITが、最終回にふさわしい、素晴らしいものとなることを願い、STAND UP SUMMIT 2019の開会を宣言します。

復興セッション

みんなで

学び、話し合い、考え、感じ、発信する 15の復興セッション



東北・東京・海外から集結した300名以上の学生たちが、15のセッションに分かれ、様々な分野のプロフェッショナルから復興への取組事例を学び、「今後自分たちにできること」を考えるプログラム。
それぞれのテーマを切り口に、復興や風化、防災などについて地域や学年の違う仲間がどのように感じ考えているのかをディスカッションしました。

［セッション一覧］

No.	講　師	地　域	テーマ	概　要
S1	三陸鉄道株式会社	岩手	地域の鉄道としての役割	「震災から復興までの歩み」地域の足を守る為、三陸鉄道が取り組んだミッションを講演。沿岸部における現在の課題等を受講者に考えて貰うセッション。講演内では7分間の津波動画を放映。 http://www.sanrikutetsudou.com/
S2	一般社団法人　ふらっとーほく	宮城	復興まちづくり・地元活性・地方創生	震災以降、多くの地域で豊富な資源を活かした試みがなされました。事例を踏まえ、現地の若者との対話を通じ、これからのまちづくりについて考えるセッション。 http://flatohoku.jp
S3	釜石市	岩手	ラグビーW杯	釜石鵜住居復興スタジアムは、津波で甚大な被害を受けた鵜住居小、釜石東中の跡地に建っています。復興の目印として、未来への希望として一大イベントとなるラグビーW杯について学び、考えるセッション。 http://www.city.kamaishi.iwate.jp/index.html
S4	株式会社マルト	福島	地域のライフラインを守る使命	災害時におけるスーパーマーケットの役割と食について考える。 また、「食べ物がなくなるおそろしさ」そして普通である事のすばらしさ(幸せ)についてを考える。 http://www.maruto-gp.co.jp/
S5	福島県	福島	観光・情報発信	根強く残る風評を払拭し、復興に向かって前向きな"ふくしま"の姿を日本・世界に発信するにはどのようにすれば良いかを考えるセッション。 https://www.pref.fukushima.lg.jp/
S6	株式会社伊藤染工場	岩手	伝統文化と復興	伝統文化である『印染め』を通して、東日本大震災直後に祭を復活させた人達について講演。地域の文化を繋ぐ大切さや祭の持つ力、またその課題について学ぶセッション。 http://itousomekoujyou.co.jp/
S7	東北福祉大学	宮城	防災士の役割	防災について意識、知識、技能をもち、かつ災害医療で活躍できる応急手当法などを身につけるセッション。 http://www.tfu.ac.jp
S8	早稲田大学	東京	地域活性化	地域活性化の挑戦事例を数多く有する島根県隠岐郡海士町の施策を学び、今後の東北の在り方を模索する。海士町×ブータンの取り組みを、海士町×東北／ブータン×東北で考えるセッション。 https://www.waseda.jp/
S9	いわきFC	福島	スポーツによる地域振興	私たちの最終的な目標は「日本を元気に」すること。その第一ステップとして、「いわき市を東北一の都市にする」ことを目指しています。自分たちの街と、そこに住まう人々が、東北一だと胸を張れる日々を築き上げるために、スポーツの力と可能性を考えるセッション。 https://iwakifc.com/
S10	スマイルとうほくプロジェクト	東北3県	メディア	被災３県の新聞社（岩手日報社・河北新報社・福島民報社）が東北に笑顔を広げ、その笑顔を全国に届けるプロジェクト。被災者の心のケアについて考えるセッション。 https://smile-tohoku.jp/
S11	NPO法人ボランティアインフォ	宮城	ボランティア	ボランティアには災害ボランティアやスポーツボランティアなど様々な種類の活動があります。 明日からできるボランティアについて考えるセッション。 http://volunteerinfo.jp/
S12	宮城県タクシー協会 仙台地区総支部	宮城	語り部タクシーの今 変わりゆく被災地	復興により、変わりゆく街並み。"語り部"として伝える内容も大きく変わってきました。 後世に伝え続ける使命と役割について考えるセッション。 https://sentakyo.org/
S13	綾里漁業協同組合	岩手	漁業	浜のファンになってほしい」小石浜ホタテ事業を通じた地域活性化や交流人口増加の取り組み、そして若い生産者の現状を学ぶセッション。 http://www.jf-ryouri.or.jp/
S14	独立行政法人 国際協力機構 （JICA東北）	国際	わたしたちのSDGs	「地球上のみんなの幸せ」のために、世界が考えた 17 の目標「持続可能な開発目標(SDGs)」。 私たちの生活にどう関係あるのか、世界と東北における取組みを紹介しながらSDGsを考えるセッション。 https://www.jica.go.jp/tohoku/
S15	TBSテレビ	東京	テレビの番組制作を体験する	参加学生が今世界にアピールしたい自慢の郷土料理を事前取材。セッションでは、どうしたら観客の目を惹くか相談しながら映像を作成。この番組を題材に、ステージ上で地域別に学生1人1人がグルメ自慢対決を繰り広げる。 https://www.tbs.co.jp/csr/

Session 01

三陸鉄道株式会社

陸中野田駅周辺の震災前・震災後

三陸鉄道の震災前と震災後の写真です。
これは、陸中野田駅から野田玉川駅までの区間です。
震災前は、防潮林（ぼうちょうりん）が並ぶ脇を走り抜ける車両が見えます。
変わって、震災後は、防潮林、そして防潮堤も流され、海が見えております。
レールも湾曲し、遠くまで流されてしまいました。





島越駅の震災前・震災後

三陸鉄道の震災前と震災後の写真です。
これは、全線の中で、一番、被害の大きかった「島越駅」。
駅周辺で残った民家は、写真右上の家屋のみです。
強化された鉄骨とコンクリートで造られたホーム、橋脚等も、全て破壊されてしまいました。
如何に、津波のエネルギーが凄まじかったかを物語っております。





大学生ボランティアの参加レポート



線路の先へ続く復興への輪ー学生の手から生まれる、活気ある三陸への1歩

講師の方からの講演をもとに、三陸鉄道の現状、課題、解決策という3つの観点から、今後三陸鉄道及びその地域がどうすれば活性化するかを考えた。講演中も、講師の方と学生達とのコミュニケーションが多く、またグループワークでも全員が積極的に取り組んでいた。震災当時小学校にも通っていないという学生がいる中、あの日の映像を改めて視聴した際の空気感から、1人1人がこの震災から何かを感じ取り、これからにつなげていこうという思いが垣間見えた。日本全国、そして海外からも支援活動が行われている今、これからを担う東北の学生と都内の学生をつないだこのセッションは復興への1歩になっただろう。

Reported by 三田 麻結佳［武蔵野大学］

三陸鉄道からつながる輪

三陸鉄道。それは、皮肉にも2011年の東日本大震災をきっかけに有名になった。震災5日後に、一部路線での復旧がメディアの注目を集め、全国区に放送されたからである。このようななかで、三陸鉄道は復興支援列車を無料で運行し、市民の生活を支えた。同時に国、県や自衛隊の協力で全線の復旧が行われた。クウェートからの原油支給もあった。その後、収入を得る努力として、ヘッドマークオーナーを募集したり、復興祈願レールを販売したり、様々なことを行った。このようにして、3・11当日に保育園の園児や老人ホームの方々を中学生が背負って、高台に避難したような、助け合いの輪ができあがった。現在、三陸鉄道は少子高齢化、モータリゼーションなど様々な問題を抱えている。だが、それに負けないような特徴あるイベントを作ろうとしている。三陸鉄道を知ることは、復興や少子高齢化を初めとする様々な社会問題を考える良いきっかけになるだろう。

Reported by 吉田 舞優［早稲田大学］

Session 02

一般社団法人ふらっとーほく

東北で頑張る人のフォロワーを増やす、復興プロデューサーになる！





「気負わず「ふらっと」東北に来てほしい。」私達は、そんな想いで初めたNPOです。東日本大震災から8年以上がたち、今でも東北には、たくさんの人が関わり続けています。そんな皆さんと東北の頑張る人をつなぐサポートを通じて、東北からはじまる新しい産業と文化をプロデュースする。これが、私たちの2011年から変わらない使命です。
例えば、宮城県の南端の沿岸部の山元町というまちでは、特産品のイチゴの9割が津波で流されました。それでも、「このまちを、ふたたびイチゴの町にしたい」と地元出身の若者たちが奮闘。懸命な姿に、たくさんの人がファンとなり、ボランティアに駆けつけました。今では、見事イチゴ栽培ができるようになり、中には「一粒1，000円のイチゴ」を作る農家さんも現れるほどに。関わった人たちは、今でも定期的にいちご狩りツアーを企画したりと、まちの新しい復興に大きく寄与しています。
今日は、その山元町から、ゲストの農家さんをお呼びしてつなぎます。その農家さんも、東日本大震災のボランティアをきっかけに、東北に移住。津波で被災した農地を開拓して農業をはじめました。人口は減っているけれど、ファンを増やして、東北に関わりつづける人を増やしたい。そんな想いを持つ農家さん。農家さんの魅力をインタビューをして、考えたプロデュース案を、農家さんに直接提案します。
今しかできないことで、東北に新しいフォロワーを。

参加学生へのメッセージ

今しかできない！復興プロデューサー求む！

大学生ボランティアの参加レポート

人を知り、理解し、発信し、新たな「つながり」を生み出す

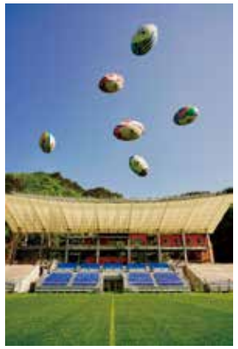
学生は一人一人が復興プロデューサーとなり、東北の復興のために活動する人をどのようにサポートするか、という課題を考えた。今回は、東北の農家さんへのオンラインでのインタビューを行うことで「人を知り理解する」段階を体験した。その後グループごとに、その人の伝えるべき魅力やプロデュース方法を話し合い、互いに発表した。
発表では「若い人の力が必要」「変わらないものを守ると同時に新しいことへの挑戦も大切」と参加者が口にするなど、前向きな志が感じられた。異なる地域で育った学生が、互いの視点を知ろうとしつつ活動に取り組む姿が印象的であった。



Reported by 仲原 菜月［早稲田大学］

Session 03

釜石市



KAMAISHI UNOSUMAI MEMORIAL STADIUM



2018年8月19日、復興スタジアムの完成記念試合。とある女子高生の「私は釜石が好きだ。」で始まるキックオフ宣言に震災を知る多くの人が涙した。
その理由は、この街の歩みにあった。1980年代に成し遂げた、新日鉄釜石ラグビー部の日本選手権7連覇。釜石市は、日本で初めて製鉄で成功し、「鉄のまち」として栄えた。釜石のシンボルであったのは地元の製鉄所。圧倒的な強さで「北の鉄人」とよばれ釜石はラグビーのまちとして全国的に知られるようになった。その後、鉄鋼業は衰退し、地域に根差したクラブチームである釜石シーウェイブスとして活動している。
そして2011年3月11日、東日本大震災。絶望の淵で人々に希望を与えたのはラグビーだった。選手たちが復旧活動に励むなか、世界中のラグビー関係者のサポートのもと釜石はRWC2019の誘致を検討し始めるのである。その会場の候補地は釜石市内で最も被害の大きかった鵜住居地区。被災し、高台に移転することになった小中学校の跡地である。震災時、この場所にあった鵜住居小学校・釜石東中学校の児童生徒約600人は率先した避難行動で津波から命を守り世界的に注目を受けた。
震災からの教訓を次の世代に受け継ぎ、地域を明るく元気にするべく、行政の枠組みだけではない経営的な観点に即した運営が求められる。
「全国・全世界のみなさまに感謝を伝えるラグビーワールドカップにしたい。」
そう、小さなスタジアムには大きな希望と想いが詰まっているのだ。

参加学生へのメッセージ

釜石のスタジアムで自分の夢を実現しよう！

大学生ボランティアの参加レポート

ラグビーワールドカップを震災復興へと繋げる。

「ラグビーワールドカップ2019」が開催される釜石市。今回のセッションでは、東日本大震災により多大な被害を受けた釜石市がW杯開催までに至った過程と知識・行動・意識が合わさってできる防災避難ナレッジについてレクチャーを受けた。このレクチャーを元に学生たちはW杯と震災復興や防災避難ナレッジとの繋がりについて考えることで理解を深めた。釜石市の人の強い思いがあったからこそ実現されるW杯開催は、私たちに「熱心な思いがあれば何でもできる」ということを教えてくれた。これからもラグビーW杯自体が釜石市復興へと繋がることを願う。



Reported by 樋山 綾［早稲田大学］

Session 04

株式会社マルト

地域のライフラインを守る使命





2011年3月11日　東日本大震災発生。これまでの地震であれば各店舗に電話で被害状況を確認するところだが、今回は桁違いの被害に連絡方法がほとんどない状態。各店舗に対処を任せるしかない。地震後の津波でも店舗への被害は出なかったが、従業員の家や家族には大きな被害が出た。
それでも、ほとんどの店が入り口付近を整理して夕方には、店を再開した。但し販売可能な商品は限定され多くのお客様が並ばれた。停電の影響でレジが使えない店舗は、電卓で計算をしながら販売。
12日になって、少しずつ各店舗の情報が本部に入ってくる。その多くは社内のWebシステムによるメールで店長とのやり取りを行う。電話は固定電話も携帯電話も公衆電話も使えない。
その為直接各店舗まで行って状況の確認をすることに。遠くは片道60km以上の所もある。いわき市内は、マルト24店舗全店営業。お客様が早朝から並ばれているので、ほとんどの店が開店時間を早めて営業開始。13日以降は全店営業を店頭駐車場で継続した。当社以外も大手スーパー等があるが、営業しているのはマルトのみでお客様が連日長蛇の列、朝早くからキチンと並ばれていた。一部の店でトラブルがあり警察に巡回もお願いした。その後も全店営業を予定していたが、12日と14日の福島第一原子力発電所の爆発事故で、① 従業員の避難者が出てきた　② 問屋、メーカーから商品が届かない　③ ガソリンの供給がなくなり従業員が出勤できない　等々の原因で全店営業が不可能になり、各地区の大型5店舗に人と商品を集中させて店を開け続けた。震災発生から10日後の3月21日は従業員を休ませる意味で、いわき地区店舗全店を休業した。そして22日から5店舗の営業再開、更に24日頃からは、一時的に非難した従業員も徐々に戻ってきたこと、市から優先的にガソリンを供給して頂いたことで営業を再開する店が増えてきて、4月1日からは改装中だった店以外すべてが営業をはじめた。
他のスーパーも3月末頃から少しずつ営業を再開したが、震災直後から弊社が店を開けなかったら、いわき市民の生活は大変なことになっていたと思う。
地域密着型のスーパーマーケットの使命は、「地域のライフラインを守ること」

大学生ボランティアの参加レポート

「食」を通してライフラインを守る。当たり前に幸せを。

本セッションでは、震災時のスーパーマルトが取った対応策についてのお話を伺い、その後、これから、私たちに何ができるのかについて話し合った。スーパーマルトは、震災時当日からお店を開店し、商品をお客に届け続け、地域のライフラインを支えた。参加学生達は、①物流②地域協力③情報協力の3つの観点からライフラインを守るために、我々がどう行動できるか討論した。これらを通して、日常生活の当たり前を幸せだと捉え直し、真剣に考える良い機会となった。



Reported by 池田 葵［早稲田大学］

Session 05

福 島 県

観光・情報発信



【現状】東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故から8年4か月が経過しました。徹底した除染や放射性物質の自然減衰の結果、大部分の避難指示区域が解除され、避難地域の復興再生は着実に進んでいます。

<避難指示区域の面積>震災直後：県面積の約12% → 現在：約2.5%

しかし、未だ風評は根強く、一部の農産物（果物や牛肉など）は全国平均価格を下回っている状態が続いており、修学旅行など教育旅行の宿泊者数は震災前の約7割弱に留まっています。

一方で、県産農産物の輸出量は、平成22年比で約142%と震災前の水準を超え、観光客入込数は平成22年比で95.3%まで回復するなど明るい兆しも見えてきており、震災以降行ってきた風評払拭の取り組みの成果が着実に現れています。

【県の取り組み】福島県では県内外の多くの方々に福島に対する興味と関心を高めていただくため、「動画」や「イメージポスター」を制作しています。既に施設や店舗、イベント、街頭ビジョン等でご覧いただいた方もいらっしゃるかもしれません。

この動画やポスターが、食や温泉、自然、歴史など福島の魅力に触れるきっかけになれば幸いです。



動 画 「もっと 知って ふくしま！」

6秒で福島の魅力を表現する動画。「福島の魅力」を身近に感じていただき、全国の皆さんが「福島の今」に関心を持つきっかけになってほしいという思いで制作しました。



県公式イメージポスター 福島の魅力と復興への感謝の気持ちを込めた5種類のポスターを作成

①「来て」【観光PR】
②「呑んで」【県産日本酒PR】
③「味わって」【県産農林水産物PR】
④「住んで」【定住・二地域居住PR】
⑤「ふくしま」【復興への感謝の気持ち】

※ポスターは全国の企業や商店、団体等などに無償で配布しております。ご希望の場合は福島県広報課（電話：024-521-7124）までお問い合わせください。
また、動画は県公式YouTubeチャンネルでも公開しています。ぜひご覧ください！

ふくしまからはじめよう。
Future From Fukushima.

大学生ボランティアの参加レポート

福島の“いま”を正しく知ってもらうために。

講師の方のお話を伺い、観光地、食、人々の前向きな姿勢といった福島の魅力について学んだ。福島の農産物が厳しくモニタリングされていることを知って、参加者は驚いていた。約45%の人がこの事実を知らないそうだ。そのために、放射線量が基準値を上回った商品は決して売り出されないにもかかわらず、福島の農産物に対するマイナスイメージが払拭できない。そこで、どうすれば福島の取り組みをより多くの人に知ってもらえるか話し合った。SNSによる発信、試食会やフェスなどのイベント開催、農業を通じた地域交流など柔軟な発想力を感じさせる意見が出された。「福島の“いま”を正しく伝えたい」という思いを共有することで、参加者全員が一体となって課題解決に向けて取り組むことができたように感じる。



Reported by 瓜生 千晴［早稲田大学］

Session 06

株式会社伊藤染工場

伝統文化と復興



2011年の震災以後大変な状況の中、郷土芸能や祭を復活させて元気を取り戻そうとする沿岸地域の皆様を支援して参りました。

岩手三陸地域を襲った津波は全てのものを呑み込んで行きましたが、地域の祭や芸能に必要な神輿や獅子頭と共に、神楽の衣装や幕・旗などもほとんどが流されてしまいました。

以前からお作り頂いていた法被などはデザインデータや色レシピが保存されておりましたが、獅子舞の衣装などの一点ものは見本を元にした再現が殆どなので、作ろうにも大きさも色も分かりません。そこで、かろうじて残されていた写真やビデオを頼りに幾もの衣装や幕を再生し、沿岸各地の祭の思い出を共に紡いできました。

被災地では祭の復活こそが、復興につながる糸口と信じて活動して来た人達が沢山おります。それは被災地でバラバラになった人と人をつなげる。被災地とそれを支援する日本全国の多くの人とをつなげる。そして過去と未来という時をつなぐ。そして明日へ。そんな想いを『伝統文化と復興』と題して学生の皆さんにお伝えし、皆さんが『つなぎたい事＝未来への目標』を話し合って欲しいと思います。

大学生ボランティアの参加レポート

始めの一歩が未来の文化、伝統になる。自分が未来につなげたいことは何か。

伝統文化と復興をテーマに、震災直後も復興のために人々の生きがいである祭りや芸能を続けた方々についてや大漁旗に込められた想い、郷土芸能と祭りの力などを学んだ。そして、参加学生一人一人が自分が未来につなげたいことを考え、発表しあった。虎舞で地元に恩返しがしたい。未来のために今を大切に生きたい。ダンスで人を笑顔にしたい。震災があったからこそ生まれたつながりを大切にしたい。様々な想いが生まれた。東北、東京、そして外国の学生が一生懸命自分たちの未来について考える姿を見て、未来を創るのは彼ら自身だと実感した。



Reported by 小林 和香子［早稲田大学］

Session 07

東北福祉大学

私たちは、東日本大震災のような甚大な被害をもたらす災害の発生を未然に防ぐことは出来ませんが、災害に対しての十分な知識と実践力をもって備えることにより私たちの「いのち」や家族、また家屋や財産に対する損害を大幅に軽減させることが可能です。減災と社会の防災力向上のための基本的知識と技能をもった、地域社会における防災リーダーを育成することは、今後も考えられる災害発生において極めて重要な課題です。

東日本大震災を教訓に、東北福祉大学防災士研修室では、2012年福祉やボランティアなど本学の特色を活かした防災士養成講座を開講し、学生や一般市民を対象とした次世代の防災人材育成を行い、地域の防災力向上に貢献しています。



2013年専門知識を生かした積極的な防災士活動を行うため、防災士資格を取得した学生と教職員800名が中心となり、東北福祉大学防災士協議会「Team Bousaisi」を設立しました。全国的に類をみない規模の大学防災士組織として、宮城県内外をはじめ、各地域の学校や自治体町内会と連携した総合防災訓練において避難所運営や災害図上訓練の運営支援を行い、復興住宅住民と防災訓練を通した災害に強いコミュニティ作りや、地域の方と共に作る防災マップ、南三陸の子供たちと共に復興イベントを開催、缶詰などの非常食を使ったレシピ作りを行うなど学生を中心とした防災啓発活動を積極的に行っています。

広報活動としてレギュラーラジオ番組を担当しています。NHKラジオ第一の「ゴジだっちゃ」で学生防災士が週替わりで生出演しています。防災士の役割や、市民の皆さんに向けて防災情報をテーマに学生が企画・構成・出演し放送しています。また、学生が実際に防災に関する活動の内容を放送し、より多くの方の防災に関する活動への参加を促しております。これらの活動を通して防災知識や活動の啓発につながるのはもちろんですが、学生防災士の伝達力を養う研修の場とにもなっています。

私たちTeam　Bousaisiが行っている活動は、「次の災害に立ち向かう防災」を役割として捉え、地域の安心・安全につながる防災力の強化の基礎を作っていると考えています。今後も学生防災士の若い力による積極的な社会貢献活動に期待して欲しいと思います。

参加学生へのメッセージ

未曾有の「災害」に備え、地域の安心・安全を守る防災のリーダーとなり若い力による積極的な社会貢献活動に期待しています。

大学生ボランティアの参加レポート

誰もがなれる。～助けられる人から助ける人へ～

東北福祉大学のTeam　Bousaisiの活動紹介を通じ、防災士の役割や意義、これからの課題等を学んだ。これまで知らなかった「防災士」の役割を知れば知るほど、災害大国である日本にとって、とても重要な資格であることを認識した。普段の生活の中から防災についての意識を持つことはもとより、災害医療や災害時要配慮者等の知識を併せ持つことにより最大限社会に貢献できるものだとも感じた。私が通う大学にも同様のサークルがあればよかったなと思う。参加学生同様に、今後の私の生活に大きな影響を与えてもらえるセッションに参加できてよかった。



Reported by　アイトジャノバディアナ［武蔵野大学］

Session 08

早稲田大学

早稲田大学における東日本大震災復興支援ボランティアの中核的な役割を、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）は果たしている。

WAVOCは2011年4月から2019年3月までで述べ7500名を超える学生・教職員ボランティアを送り出してきた。現地のニーズにあわせて、多様なボランティア活動を継続している。また、記憶の風化への懸念から、近年は被災地でのスタディツアーも実施している。

今後の課題として、蓄積された復興支援の取組みのノウハウのマニュアル化や、あわせて、震災復興支援を通した教育・研究・社会貢献活動の発信を更に強めていくことが求められている。

震災発生から8年が経ち、現地でのボランティア活動は、泥かき、がれき撤去から現地イベントへの音楽サークル派遣、観光復興支援、地域コミュニティ支援等へ変化をしている。学生に出来ることは少ないかもしれないが「微力だが無力ではない」と信じ、今後も復興への協力を続けていきたい。





WAVOC Waseda University The Hirayama Ikuo Volunteer Center
早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター

参加学生へのメッセージ

微力だが無力ではない

大学生ボランティアの参加レポート

STAND UP SUMMIT 早稲田大学セッション

SDGsの17ゴールを利用して東北復興の未来を考えよう。
主に三つの県を中心に復興への取組をディスカッションした。
その結果：

①福島県：リアルな声を知る機会を増やす、実際に行動できる、協力できる実施手段を考える。
②宮城県：風評被害について、SNSなどで正しい情報を伝えて魅力をアピールする。そして、災害に強い町づくりも一つの重要なことである。
③岩手県：避難場所を増やす。企業や他県との協力も必要である。県の魅力をアピールする。



Reported by　王淑萍［武蔵野大学］

Session 09

いわきFC







いわきFCは、「いわき市を東北一の都市にする」ことをミッションに掲げ、東北社会人サッカーリーグ1部を戦う社会人サッカークラブです。
いわきFCが目指すのは、目先の勝利やJリーグへの昇格などではなく、スポーツを通して人材育成や地域との一体化などの「人づくり」「まちづくり」の好循環を生み出し、いわき市が誰からも選ばれる街となるよう貢献することです。
これを実現するための具体的なストラテジーとしているのが、『スポーツファシリティの運営・整備』『魂の息吹くフットボールで熱狂空間を創出する』『世界基準のチームビルディング』『未来を担う人材の育成』『地域との一体化』の5つです。
創立から約1年半後の2017年には、飲食店などを備えた日本初の商業施設併設型クラブハウス「いわきFCパーク」をオープンし、2018年までに累計65万人を超えるお客様が来場。いわき市を代表する人気観光地のひとつとなりました。いわきFCはここを拠点として、「魂の息吹くフットボール」をテーマに90分間倒れない、止まらないエキサイティングなサッカーを展開しています。
毎週水曜日には、地域の子どもたちの体力・運動能力向上を目的とした無償のスポーツスクール「いわきスポーツアスレチックアカデミー」を実施。育成組織「いわきFCアカデミー」では、サッカーのみならず語学力や栄養学の習得などにも注力し、多様性を育成する独自の人材育成を行なっています。
今年1月にはいわきFCパーク内にクリニックを開設し、地域医療と健康課題の克服に貢献していくほか、2月にオープンした「いわきFCステーション」では、地元産食材の美味しさの発信や、風評被害の払拭を目的のひとつとしています。
いわきFCは、サッカーだけではなく、こうした多岐にわたる活動を通して社会価値を創造し、いわき市を「復興から成長へ」導いていく一助となってまいります。

大学生ボランティアの参加レポート

スポーツの力で「いわき市を東北一の都市にする」ために

殆どの学生がいわきFCの存在を知らず、セッションはまず社長のお話を聞くことから始まりました。震災がきっかけでいわきFCが誕生したこと、震災によって運動をする機会をなくしたことなどを知りました。Jリーグの参入よりも地域の活性化を目的とする姿勢に感銘を受けました。
話し合いではスポーツで地域を活性化するための課題や自分たちに何ができるかなどを考えました。自らスポーツを体験して魅力を肌で感じ、それをSNSで国内外へ発信する、地域の特色を生かしたスタジアムづくりをするといった画期的な意見が飛び交い、学生たちの学びも深まりました。



Reported by 神丸 真貴人［早稲田大学］

Session 10

スマイルとうほくプロジェクト





スマイルとうほくプロジェクトとは、東北の3つの新聞社、岩手日報社、河北新報社、福島民報社が手を取り合って、被災地に笑顔を広げ、日本中に東北の元気を発信しています。
「花を咲かせるプロジェクト」「仮設キャラバンプロジェクト」「つながる、広がる！笑顔の輪」など今までに様々な活動を行ってきました。
「花を咲かせるプロジェクト」は花を植えている方々の笑顔や、花が咲いた様子などを伝えていくことで、東北に笑顔を広げていけたらと現在も活動しています。今年7月には福島でヒマワリの種まきのイベントを行い、晴天のもと約650名が集いました。今年8月下旬頃にはスマイルマークのヒマワリが見ごろを迎えました。
また、「仮設キャラバンプロジェクト」では東北3県の仮設住宅や復興公営住宅を訪問し、花植えや、ハンドマッサージなどを通して被災者の皆様とのコミュニケーションをとり、少しでも笑顔が増えていってほしいという思いで活動しています。
他にも、スマイルとうほくプロジェクトのホームページでは、「つながろう！スマイルフォトリレー」と題した、各イベントで撮影したものや、全国の皆様から笑顔の写真とメッセージを募集し集まったものをバトンに、つなげよう、つながろうという取り組みも行っています。東北のみなさまからは「東北の元気を伝える写真とメッセージ」を、全国のみなさまからは「東北の人たちに笑顔を届ける写真とメッセージ」をそれぞれ募集し、掲載しています。
震災から8年がたち、ずれていく被災地と被災地以外との意識、状況。進む復興、進まない復興。私たちは東北の「いま」を正しく見極め、東北の心に寄り添いながら震災の記憶と体験を伝えることで、東北とそして日本全体の将来につなげる活動を今後も行っていきます。

大学生ボランティアの参加レポート

笑顔の花を咲かせよう。寄り添い、想いつづける支援活動 ～ともに未来へ～

地域の新聞社だからこそできる、被災者の心に寄り添った記事の中から復興の課題、人々の困りごとを見つけ、学生全員で意見を交わした。今回は「原発事故」「風化の防止」「心の復興」の三つの課題と問題点を指摘、どんな方法で解決に導くかを議論し一枚の大きな新聞にまとめた。8年がたった今、復興が進み東北は元気になったように見える。だからといって「もう大丈夫だ」と震災が忘れられ、誤ったイメージが付いたままの現状を放っておくわけにはいかない。人とのつながりを大切にし、ともに支え合いながら私たちは未来へ震災の教訓を伝えていく必要がある。



Reported by 脇舛 美菜［早稲田大学］

Session 11

NPO法人ボランティアインフォ

2011年から2014年までの4年間で岩手県・宮城県・福島県で災害ボランティアに参加した人の数は140万人を越えると言われています。
震災から8年以上が経過する今でもボランティアニーズは存在し、息の長いボランティア活動が求められています。
東北以外でも2016年の熊本地震や、昨年の大阪府北部地震、平成30年7月豪雨などでも多くのボランティアが復旧・復興のボランティア活動に参加しています。
ボランティアインフォでは災害発生時に、いち早くボランティア募集情報の収集を開始し、フォーマットを整え、ボランティア情報として発信することで、ボランティアを求める人の元にボランティアを希望する人をつないでいます。
そして災害時に1人でも多く方がボランティアに参加するために、日頃から自身の生活の範囲の中でボランティア活動を行う人を増やし、日本のボランティアをもっともっとカジュアルにしていく活動をNPO法人ボランティアインフォは実施しています。
セッションでは災害ボランティアを中心に様々なボランティア活動について知り、そして自分にできるボランティア活動について参加学生と一緒に考えていきます。
NO VOLUNTEER, NO LIFE.





NPO法人 ボランティアインフォ
NPO法人ボランティアインフォ
http://volunteerinfo.jp/

参加学生へのメッセージ

一緒にボランティアについて考えましょう！

大学生ボランティアの参加レポート

ボランティアは、他人のためでもあるが、自分のためでもある。

まず、参加した学生の皆さんに「ボランティア」で思いつくイメージは何かを挙げてもらいました。みんなが出してくれた意見の中に、「ボランティアは難しい」という意見や、「他人のためにする」という意見が出ました。しかし、北村さんの話を聞いた後で、再度「ボランティア」のイメージを聞くと、参加してくれた学生全員がイメージを変えていました。ボランティアについて知らなかったことを見つけ出したのかもしれません。この発見をこれからの人生に生かしてほしいと思います。自分自身もこれからどうしていけばいいのかを見直すいい機会になりました。



Reported by 来住野 竜也［武蔵野大学］

Session 12

宮城県タクシー協会 仙台地区総支部



今後の語り部タクシーの存在意義

一般社団法人宮城県タクシー協会では震災の翌年11月から“語り部タクシー”を始めました。タクシー乗務員が自らの体験と被災状況、被災地の今をお客様に伝えています。最後に備えについてお話をしています。多く方にご利用いただき、開始から2017年末まで約30万人にご利用いただきました。最近では観光という目的で訪れる方も多く、継続的に案内させていただいております。
東日本大震災大震災から8年、岩手、福島、宮城被災3県でいまだ仮住まいをされている方々がいます。その背景には住まいの再建の遅れ、自主再建の見通しが立たない高齢者がいまだ多くいるということです。若い方々を中心に内陸部（都市部）に移住が進み、高齢者は判断をできずに地元に残り、沿岸部の人口は明らかに減っています。こうした課題も意識しつつ、新たな賑わいを作り出せるよう私たちも微力ながら様々な取り組みを今後も続けていかなければなりません。そのためには地域連携、人材の育成など私たちが解決しなければならない課題も多くありますが、皆さんと一緒に良い方向に導いていきたいと思います。

大学生ボランティアの参加レポート

「発信力」が風化を食い止める鍵となる！

タクシードライバーが自らの経験を語る「語り部タクシー」。セッションでは語り部タクシーのドライバーや利用者の減少について話し合った。このセッションを行うまで語り部タクシーの存在を知らなかったという学生がほとんどだった。だが、震災と向き合って様々な考えを共有し、課題を通して語り部タクシーと自分たちの未来について深く考えることができた。
発信が容易にできる今の時代だからこそ、東日本大震災の風化をさせないために「発信力」がより一層大切であると実感した。



Reported by 志村 かおり［早稲田大学］

Session 13

綾里漁業協同組合



岩手県大船渡市綾里地区は、入り組んだ入江が広がる漁業の盛んな地域です。東日本大震災では、最大25mまで津波がかけあがり、大きな被害をうけました。綾里地区の「恋し浜青年部」も、船や養殖施設など全ての漁業施設を流されました。しかし、彼らは青年部が育ててきた「消費者との関係」によってどこよりも早く復興を遂げることができました。恋し浜で育ったホタテの全国のファンが支援の手を差し伸べ、義援金や復興ボランティアとして支援をおこない、さらに、あちこちでホタテの販売会を開いてホタテをPRしてくれたのです。おかげで、恋し浜はどの浜よりも早く復興。さらには震災前よりもブランドや知名度が広がりました。

その震災から8年。復興はすすんできましたが、岩手沿岸には、過去、ほぼ50年周期で大津波が到来しています。次の大津波も遠い未来ではありません。そしてこれは東北だけではありませんが、水害や気象災害も多発し、いつどこが被災地になるのか、誰にもわからない状況です。

もし、自分の地域に、大きな災害が来たときに、あなたはどんな対応をしますか？そしてどんな復興を目指しますか？

今回のワークショップでは、漁師として震災を経験した佐々木淳と、外部の人間として復興にたずさわった阿部正幸の経験もまじえながら、誰にとっても他人事ではない「災害と復興」を考えましょう。

そのうえで、東日本大震災を経験した我々が今後の社会全体のためにその経験をどう活かすべきか、考えたいと思います。

参加学生へのメッセージ

「被災地」を自分ごととして考えてみましょう！

大学生ボランティアの参加レポート

ピンチをチャンスに変えよう！人とのつながりを原動力に。

約８年前の東日本大震災によって様々なものを奪われた漁師たち。『何年かかっても良いからまた前と同じような魚介が食べたい』というお客様の声に応えるべく、いち早く復興へと向かったそうだ。それは人との絆や信頼関係があってこそだと学んだ。また、すぐ気持ちを切り替え、前に進むのは大変だが、辛い状況を逆にチャンスに変え、地域の活性化に挑んだ。ポスターには震災が起きて一番始めに困るものを提示した。ポスター作成中には、参加生徒それぞれの震災の体験談を共有した。東京と東北ではまるで違い、お互いの話に刺激を受けたとともに、次の震災があった時の解決策も話し合った。



Reported by 笠松 真優［早稲田大学］

Session 14

独立行政法人 国際協力機構（JICA東北）





JICAの復興支援

独立行政法人国際協力機構（Japan International Cooperation Agency：JICA）は、日本の持つ豊富な人材や経験を活かし、開発途上国が抱える課題解決に取り組む、日本の政府開発援助（ODA）の実施機関です。通常 JICAは開発途上国が地震・洪水・台風などの災害にあった場合、その国の復興支援を行いますが、東日本大震災においては職員の被災地派遣、支援にかけつけた国際機関の調整、被災地を支援するNGOへの協力など、JICAの海外経験を活かし、国内での支援活動を行いました。震災後も、開発途上国の多くの方々を日本と東北に招き、東日本大震災からの復興や防災の取組について学んでもらうことで、自国での災害に強いまちづくりに貢献しています。

セッション内容

今回のセッションでは、「わたしたちのSDGs」と題し、「地球上のみんなの幸せ」のために、世界が考えた17の目標「持続可能な開発目標（SDGs）」について取り上げます。2030年までに世界の国々が共に達成することを目指すこの目標。私たちの生活にどう関係があるのか、世界と東北の復興の取組みを紹介しながら、身近なSDGsについて楽しく学び、一緒に考えてみましょう。

参加学生へのメッセージ

SDGs？知らなくても大丈夫。一緒に考えてみましょう！

大学生ボランティアの参加レポート

住み続けられる街をつくろう！私たちができること × SDGs

テーマは「持続可能な開発目標(SDGs)」の11番の目標「住み続けられる街づくりを」。自分たちの住んでいる街をよりよくするためには、どうやって街の治安を良くするのか、日常生活で不便だと思うことを解消するためには何が必要なのかなど、自分たちのできることを4つのチームに分かれて違う視点での議論が行われた。若者たちの実体験だからこそ、大人の方が思いつかない問題点と解決策も数々挙げられたところが特に印象的だった。そして、議論が進んでいる中では、学生たちの発言がどんどん活発になり、すごく活力を感じた。一朝一夕には解消できない問題ばかりだが、地域の人々の想いを繋げていれば、これからもっと素晴らしい街になれると強く思った。



Reported by 胡 聡［早稲田大学］

Session 15

TBSテレビ





JNN・JRN共同災害募金の活動

TBSを基幹とするテレビ、ラジオの放送網であるJNN、JRNは、被災者救援のため2011年3月14日「東日本大震災JNN・JRN共同災害募金」を立ち上げ、これまで2,057,157,471円(2019年6月3日現在)の義援金をお寄せいただいています。全額、日本赤十字社を通じて被災地の各義援金配分委員会におくられ、被災された方々のお手元に届けられます。また、東日本大震災のほか「北海道胆振東部地震」「平成28年の熊本地震」の被災者への募金も現在も実施しています。

歌の心を被災地へ、そして未来へ「心に花を咲かせよう」プロジェクト

復興ソングとして話題になった「あすという日が」の作詞家山本瓔子氏が、心の復興を願い「心に花を咲かせよう」を作詞。作曲は次世代を担う新進気鋭の作曲家として注目されている上田真樹氏。この合唱曲に感銘を受けた東京の音大生などが合唱団を結成し、被災地支援活動を開始。今年度は新曲「未来行きの切符」を発表し、福島への活動を企画中。TBSはプロジェクトの実行委員として２０１２年より支援を継続して実施しています。

Support Our Kidsの活動に協力

諸外国大使館、国内外の有名人や企業・団体が発起人となり、被災児童の自立支援に取り組む活動です。毎年東北出身の中高生50人程度を選抜し海外に短期留学を実施する、10年継続プロジェクトです。TBSはこの活動に賛同し、発起人の一企業として2012年から協力させていただいております。

参加学生へのメッセージ

未来を創るのは、あなたたちです。どのような場面でも常に「未来」を意識して物事をじっくり考える習慣を身につけてください！

大学生ボランティアの参加レポート



伝えよう、東北の素晴らしさを。届けよう、この想いを。

テーマは我が町グルメ自慢。岩手と宮城・福島の2チームに分かれ、自分達で撮ってきた地元のグルメをディレクターや編集、ナレーターなどに分担し、動画を媒体に人々に伝える楽しさを味わいました。地元の名産品を思わず食べたくなるような発表で観客も魅了されていました。震災から今年で8年が経ち、今でも凄まじいあの日が私にも脳裏に蘇ってきます。その中で、学生がふと言っていた"確かに震災によって失ったものは多いが、新たな繋がりや人の温かさに気付いた"という言葉の想いを映像に伝えることが出来たのではないかと思います。

Reported by 相川 悠人[早稲田大学]



主体的に。みんなと協力することを通して成し遂げた喜びを分かち合おう

TBSテレビのセッションでは、参加学生を岩手と宮城・福島に分け、それぞれのご当地グルメを事前に撮影・取材したものをもとに東京の学生と協力しながら一本のVTRを仕上げる。また、VTRには復興をテーマにしたワンカットも合わせて紹介するという内容である。動画の編集やナレーションなど学生たちが普段体験することのないような作業を主体的に取り組めるにはどのようなサポートが必要なのかを考えながら学生と接していた。作業自体はそう簡単なものではなかった。しかし、苦戦しながらも学生同士でコミュニケーションを交わしながら発表に挑んだ。発表している時のみんなは堂々としていてかっこよかった。発表が終わり、ひと段落ついてほっとした表情は、とても生き生きして輝いて見えた。

Reported by 藤村光 マリサ[武蔵野大学]

ポスタープレゼンテーション

それぞれのセッションの成果として、学んだ内容や自分たちができることを中心にポスターを作成。ポスターを元に、ユニークなアイデアや熱い想いをプレゼンテーションしました。学生たちからは、講義を受けた団体の課題を解決することで属する業界の発展、ひいては東北の発展にどうつながるのかといった、大きな未来を見据えた意見も聞かれ、非常に有意義なセッションとなりました。



講　評　石原 清次　株式会社東京ビッグサイト 代表取締役社長



皆さんの発表を聞いて、「いまの被災地の状況を知ってもらいたい」「もっと知らなくてはならないことがある」という想いが伝わってきました。また、今日初めて会った仲間たちと議論する中で、新たな気づきがあったと思います。
その新しい気づきをどんどん周りに伝えることで復興について考える輪を広げていってもらいたいと思います。

復興ディスカッション



震災で失ったものはもちろんあるけれど、得たものもきっとあるはず。今年のディスカッションでは「つなぐ」をテーマに、声優の鈴村健一さん司会のもと、パックンマックンのお二人をゲストに迎え、「これまでに築いてきたつながりは何か」、そして「私たちはそのつながりを通してどのように未来を歩んでいくべきなのか」について、学生たちと議論しました。
学生たちは、震災があったからこそ気付けた避難訓練のあるべき姿や、震災によって生まれた地域の絆などについて発表。登壇した代表学生だけでなく、会場の学生も自主的に手を挙げて発表するなど、活発な話し合いになりました。「どんな未来をつくりたいですか」というアンケートの質問で一番多かった答え、「国籍や障がい、性別も乗り越えて皆が混ざり合う未来」を作るにはどうしたらいいのか、を話し合った際にはそれぞれ違う国籍を持つパックンマックンのお二人のお話を交えながら「つながりの先にある共生社会」について考えました。
ディスカッションの最後には2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会において、皆が混ざり合って、たくさんの人におもてなしをするためにはどうしたらよいか話し合い、登壇者全員が、2020年までに自分ができることを宣言して、ディスカッションは幕を閉じました。



司　　会：声優　鈴村 健一
（声優／JFN「ONE MORNING」パーソナリティ）
ゲ ス ト：お笑い芸人　パックンマックン
登壇学生：清水 ナイキ（早稲田摂陵高等学校２年）
佐々木 董（釜石東中学校２年）
門脇 孝太朗（多賀城高等学校１年）
林 沙瑛（調布市立第五中学校３年）
石井 文夏（都立東高等学校３年）
瓜生 友莉愛（会津農林高等学校３年）

パックンマックンお笑いステージ

❶ ネタ（みんながつながる自己紹介）
❷ アイスブレイク

笑いをおりまぜた自己紹介から始まり、参加型のステージで一気に会場はリラックスした雰囲気に。
そのあとはパックンマックンも客席に降り、参加者同士自分と違った文化的背景を持った人と会話をするアイスブレイクに挑戦。
知らない人とコミュニケーションをとることの重要性を学び、他人と「繋がる」ことの楽しさを実感するアイスブレイクで会場は大いに盛り上がりました。ディスカッションでは、違う国籍、文化背景をもつコンビとしての困難やそれをどう克服してきたのかなどをお話ししていただきました。





閉会宣言　永渕 凛　聖ウルスラ学院英智高等学校１年



前日のワークショップで閉会宣言の役に立候補。パラスポーツ体験では、段差も恐怖の対象になるということなどを学び、来年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて自分も手伝いたいと語りました。また、STAND UP SUMMITで様々な方に支えられていることを実感し、特にセッションで学んだ“熱心な思いがあれば何でも出来る”という信念を持ってラグビーW杯招致に尽力した釜石市の事例から、「自分もそんな人になりたいと思った」と力強く宣言し、「スタンドアップ！」の唱和でフィナーレを締めくくりました。

講　評　寺田 陽次郎　レーシングドライバー／ミスタール・マン　特定非営利活動法人次代の創造工房 理事長



本当に素晴らしいディスカッションだったと思っています。この会場をご提供頂き、企画を6年にわたって開催していただいた東京ビッグサイトの石原社長はじめ、東京都の方々、スポンサーしていただいた企業の方々に、この場を借りて御礼申し上げます。僕は震災の後、ひとつ大切にしている言葉があります。それは、皆さんは決して“ひとりじゃないよ”ということです。日本中、世界中のみんなと繋がって、これから皆さんが復興、それから東北で起きたこと、今世界中で起きているいろんなことに、大きな愛情を持って、今日学んだことを活かしていただくことを祈念して、挨拶に代えたいと思います。本当に今日はお疲れ様でした。ありがとうございました。

復興への取組みパネル展

セッション団体・サポーター企業の復興への取組みを学べるパネル展を同時開催しました。





※各セッションのパネル内容は、P05～19をご覧ください。

オフィシャルサポーターの復興への取り組み

＜みずほ＞の取り組み

MIZUHO

＜みずほ＞は、東北全県に支店を有し、東北とは深い縁があります。そのような縁もあり、東日本大震災からの復興支援には、グループの総力を挙げて取り組んできました。被災企業の設備復旧や再生可能エネルギーの普及支援、農林漁業6次産業化のサポート等、金融グループとしての機能を活かした支援に加え、被災地への社員ボランティア派遣や社員向け被災地産品販売会等、社員参加型の支援活動も継続的に行ってきました。現在、特に力を入れて取り組んでいるのが、震災による津波で被害を受けた海岸防災林の再生です。
2013年4月、福島県、いわき市、現地の防災林所有者と協定を締結し、福島県いわき市の海岸防災林再生に取り組む「＜みずほ＞の森プロジェクト」を開始しました。今後、2019年3月までの間、1万3千本のクロマツの植樹と育成に取り組んでいきます。
＜みずほ＞は、今後も被災地を継続的に支援していきます。



「〈みずほ〉の森プロジェクト」植樹活動のようす(2015年5月)



協定締結式(2013 年4 月)

＜三井不動産＞の取り組み

&EARTH　三井不動産 MITSUI FUDOSAN

当社グループでは、社会貢献活動の重点分野の一つに「地域社会」を掲げ、被災を受けた地域の復興を継続的に支援しています。
オフィスや商業施設等多くの方が訪れる場所でマルシェを定期的に開催し、被災を受けた地域企業の認知度向上、観光誘致の促進に貢献しています。
また、被災を受けた地域を訪問する社員研修を実施し、講話の拝聴や現地の方々との交流を通じた防災意識の向上、及び東北と東京の継続的な交流を進めています。
さらに、当社グループのノウハウやリソースを生かし、東北と東京をつなぐ情報発信・交流拠点として「わたす日本橋」を開設しています。「わたす日本橋」では、生産者の想いが込められた東北食材を提供するダイニングバルや、TV会議システムを使った被災を受けた地域の中学生への「遠隔授業」などさまざまな形で継続的な交流を図っています。
震災から月日が経過するにつれ、被災を受けた地域の状況に合わせて、復興の形や求められる支援も刻々と変化しています。私たちは今後も現地とコミュニケーションをとりながら、現地の「想い」「いま」「これから」を大切に、継続して応援してまいります。



「わたす日本橋」外観



「遠隔授業」の様子

＜とんかつ まい泉＞の取り組み

とんかつ まい泉

「とんかつ まい泉」は、1965年の創業以来「箸で切れるやわらかなとんかつ」をお届けしてまいりました。看板商品である「ヒレかつサンド」は多くのお客様に愛され続けています。
まい泉では、次世代支援を目的とし、スポーツを頑張るこどもたちを応援しようと「こどもプロジェクト」を実施しています。野球やサッカーなどスポーツで「勝つ」を目指して汗を流すこどもたちを「ヒレかつサンド」で応援する活動です。
東日本大震災復興支援としては、この「こどもプロジェクト」の一環で、被災地のひとつである福島県相馬市で開催されている「中西哲生サッカー教室」に支援をさせていただいています。これは、スポーツジャーナリストの中西哲生氏、NPO法人ドリームサッカー相馬、相馬市サッカー協会の皆さんが福島県相双地区の小学生約100名を対象に毎夏実施しているものです。サッカーボールを懸命に追いかけるこどもたちが、まい泉の「ヒレかつサンド」を頬張って笑顔になる、そんな笑顔がひとりでも多くなるよう、支援しています。
また、熊本地震、平成30年7月豪雨でも、まい泉はさまざまな形で災害復興支援をさせていただいております。まい泉の企業理念である「お客様の美味しい笑顔」のために、これからも支援を続けてまいります。





＜トッパンフォームズ＞の取り組み

TOPPAN FORMS

ふくしま応援企業ネットワークへの加盟と風化防止活動の実践

トッパン・フォームズ株式会社は2015年5月から、福島県の風評被害払拭の活動を目的とした企業133社（2019年6月時点）で構成された「ふくしま応援企業ネットワーク」に加盟しています。

各加盟企業は、福島県産品の購入促進や、福島県内の観光促進、福島県産品の安全性についての理解活動、各企業が実施している活動事例の紹介等の情報共有を図りながら、活動の輪を広げています。

その中で、当社では当社滝山工場社員食堂での福島ご当地メニューの採用や福島県産食材の使用、「ふくしま応援企業ネットワーク」の活動情報を発信するWebサイトの制作協力、会社行事の贈答品・記念品に福島県産品をセレクトするなど、継続的な支援活動を行っております。

本年7月には第2回福島県特産品販売会「企業マルシェ」を東京都港区にある本社ビルにて開催しました。「企業マルシェ」は2015年に第1回を開催し、大変好評を博した取り組みです。参加者は福島県の地元のみで取り扱っているお菓子やラーメン、果物、お酒など、多種多様な物品の購入に加え、福島県からいらっしゃった販売員の方とのコミュニケーションを通じて、震災復興への理解が深めることができました。

当社では、今後も福島県に関わるさまざまな活動に参画し、「風評」払拭だけでなく「風化」防止のために、震災からの時間経過とともに福島への関心が薄れないよう継続した活動を実施して参ります。

第1回「企業マルシェ」開催の様子





＜ムラヤマ＞の取り組み

株式会社ムラヤマ

私たちの取り組み ～絵本の世界で子ども達を笑顔に！～

震災の恐怖から受けた心のダメージは子ども達にとってどれだけ辛いものか想像に難くありません。ムラヤマの社内組織【感動創造研究所】は、子ども達の「笑顔」を絵本をつかって取り戻すべく、また子ども達の笑顔が被災者全体の笑顔と「心のケア」に通じるものと信じ、活動を行いました。

『移動絵本ライブラリー』

2011年4月　東京ビッグサイト 西ホールの避難所
当社が所有している組み立て式ダンボール箱を利用し、約380冊からなる絵本で構成したライブラリーを展開しました。



準備段階から、子ども達も見慣れないものに興味津々で待ち切れなかったのか、組み立てたり絵本を並べたりする準備の段階からお手伝いをしてくれました。そして絵本の読み聞かせやお絵かき、鬼ごっこ等、子ども達と一緒になってたくさん遊び、楽しい交流が出来ました。

『りょうぜん絵本カーニバル』

2012年7月、2013年9月福島県伊達市霊山町にある霊山こどもの村にて「移動絵本ライブラリー」の一環として開催しました。





伊達市では、随所に放射線量測定器が配置され、放射線量が大きな問題となっていました。自由に外で遊べない子ども達のために、500冊以上の絵本の森で、物語を聞く、物語をつくる、オリジナルの生き物を描く、絵本づくり、クラフトカーニバル、トークショー等、盛りだくさんのプログラムで、楽しく過ごしてもらいました。

その他、ムラヤマの取り組み

- ■2011年7月：せんだいメディアワークにて『よみがえれ！子どもの笑顔・元気展 絵本作家からのメッセージ』同時開催『絵本カーニバル』を開催
- ■2012年8月：高田大隅集いの丘商店街 ミニ「あかりの木」制作に参加
- ■IPPO IPPOプロジェクト：経済同友会が立ち上げた復興支援プロジェクト。ムラヤマもこれに賛同して、2011年11月から2016年9月末までの5年間にわたり、寄付を行い、被災地の人づくりや経済活性化に役立てるため、学校などへの支援を行いました。

＜損害保険ジャパン日本興亜＞の取り組み

損保ジャパン日本興亜

全国で復興支援マルシェ開催

当社グループは、2018年3月、被災された地域の皆さまの復興を支援するため、全国各地で社員向けの「復興支援マルシェ」を開催しました。東日本大震災の影響が残る福島県のほか、地震被害に遭われた熊本県、集中豪雨被害に遭われた福岡県・大分県・秋田県などの特産品を販売しました。



芸術・文化活動を支援する「SOMPO アート・ファンド」の設立

当社は、全国の芸術・文化活動を支援するファンド「SOMPO　アート・ファンド」を2016年度に立ち上げました。全国各地の活動から地域の魅力を顕在化させ、その独自性を発揮していくようなアートプロジェクトや、被災地の復興支援に向けて取り組む活動などに助成を実施しました。



復興祈念パッチワーク展の開催

2018年3月、新宿本社ビルで復興祈念パッチワーク展を開催しました。東日本大震災で被災した着物を譲り受けた方が、震災の記憶を伝えるべく、着物を再生する過程で出た端切れをパッチワークにするプロジェクトで、本社ビルにご来場いただいたお客さまに広くご鑑賞いただきました。



「福島ひまわり里親プロジェクト」の開催

2018年6月、NPO法人チームふくしまが主催する「福島ひまわり里親プロジェクト」を開催しました。東北の復興がさらに進むことを願い、当社の東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館に所蔵のゴッホ≪ひまわり≫の前での「ひまわりのうた」の合唱や、ひまわりの種まきなどを行いました。



＜サントリー＞の取り組み

SUNTORY

サントリーグループの東日本大震災復興支援活動「サントリー東北サンさんプロジェクト」

サントリーグループは、「太陽のようにあたたかな光が、被災地にさんさんとふりそそぎますように」という思いを込めて、2011年に「サントリー東北サンさんプロジェクト」を立ち上げ、「漁業」「子ども」「チャレンジド・スポーツ」「文化・芸術・スポーツ」の分野を中心に総額108億円の規模で復興支援活動を行ってきました。私たちが大切にしているのは、現地に赴き、地域の方々と活動を続けていくこと。これからも岩手県・宮城県・福島県の皆さまに寄り添いながら、東北に笑顔と希望が増えていくような未来づくりのお手伝いができればと考えています。





漁業

被災地の主要産業である漁業の早期復興のため、岩手県・宮城県に合計55億円を寄付し、漁船取得や漁具・漁業関連施設の復旧に活用いただいています。

子ども

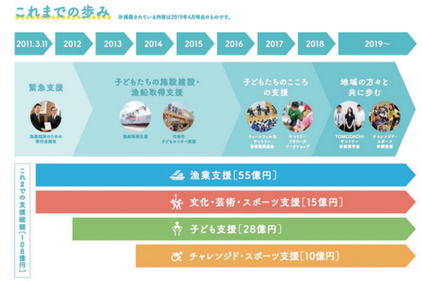
子どもたちの健やかな成長を応援するため、奨学金給付やNGO助成などの経済的支援と、学童保育・子どもセンターなど安心して学び遊べる場所づくりを中心に幅広い支援活動を行っています。

チャレンジド・スポーツ

2014年からは、チャレンジド・スポーツ（障がい者スポーツ）の育成・普及をサポートしています。アスリート個人・団体への奨励金、普及のための体験教室実施や環境整備などに幅広く取り組んでいます。

文化・芸術・スポーツ

サントリー芸術財団・サントリー文化財団などによる文化・芸術支援やバレーボールチーム・ラグビーチームなどによるスポーツ支援にグループを挙げて取り組んでいます。



前日ワークショップ



参加者たちは5つの班に分かれ、シッティングバレー、車いす、義足、ローイング、ボクシングを講師の皆様のレクチャーを受けながら体験しました。
最初は初めてのグループ、初めての体験に不安そうにしていた参加者も見られましたが、ワークショップが始まると汗を流しながら仲間や講師の方々と笑顔で交流し、ほかの人の視点で日常を考え、スポーツは人と人をつなぐことを自ら体験することで学びました。また、義足体験のブースには「東北へのエール！！」寄せ書きボードが併設され、参加者たちは思い思いの言葉をボードに書き込みました。

ファシリテーター：三浦 浩さん
（リオ・パラリンピック　パラ・パワーリフティング男子 49 キロ級 5 位入賞　株式会社東京ビッグサイト）
司　　会：駒澤大学 1 年 秀岳 卓哉さん
協　　力：一般社団法人 日本パラバレーボール協会
公益財団法人 鉄道弘済会
公益財団法人 日本ボート協会
アゼリーグループ






参加者自ら体験し
つながる喜びを
感じました!!






東日本大震災被災児童自立支援活動発表



東日本大震災以降、「東北から復興を担う未来の意思を育てよう」と、「復興のリーダーづくり」に取り組んでいる本イベント共催者NPO法人次代の創造工房より、東日本大震災被災児童自立支援プロジェクト「Support Our Kids」について活動発表が行われました。同PJでは、海外ホームステイ体験を被災児童に提供することでその自立心を育むプログラムを展開。PJに参加した生徒も登壇し、海外体験を通して得た気づきやつながりを、帰国後にどのように活かしているのか、今後の東北復興にどのように活かしていきたいか、などを発表しました。






東北の未来、日本の未来、
世界の未来は、
自分たちで創っていく!!






STAND UP FESTIVAL



翌日のSTAND UP SUMMITの前夜祭としてSTAND UP FESTIVAL（スタンドアップフェスティバル）を開催。東北学生による郷土芸能や東京学生による合唱と創作ダンスが披露され、フィナーレではプロジェクションマッピングと花火が有明の夏の夜を盛り上げました。昨年に引き続き、東北グルメや地産品販売コーナーを展開し、２時間のイベントでありながら約2,000人にご来場いただき、臨海副都心地域の賑わい創出に貢献しました。

スペシャルサポーター

本イベントの趣旨に賛同頂いた、生駒里奈さん（女優・タレント）がスペシャルサポーターとしてイベントを盛り上げてくれました。ご自身も東北出身ということで、震災当時の話や諦めないこと、助け合うことの大切さを参加学生に対してお話しいただくと同時に、これからの未来を担う参加学生へエールを送っていただきました。



新作プロジェクションマッピング

2018年冬に東京ビッグサイトで開催した「東京国際プロジェクションマッピングアワードvol.3」において最優秀賞に輝いた京都精華大学と監修を務めた（株）ピクスによる共同作品を上映。「平和への祈りと東北復興への願い」をテーマに、スペシャルサポーターである生駒里奈さんのアイディアを盛り込んだ作品となりました。



ミュージック花火

夏祭りをテーマとしたプロジェクションマッピング映像との連動で約７００発の花火がスタートし、東日本大震災復興支援ソングである「花は咲く」にのせたフィナーレでは音と光の幻想的な世界を表現しました。観覧者からも忘れられない「夏の思い出になった」との嬉しい感想を頂きました。



東北グルメエリア／地産品販売コーナー

牛タンシチューやみそ田楽、桃ゼリーなどの東北グルメをご用意し、来場者は食事を楽しみながらプログラムを観覧いただきました。また、昨年に引続き東北3県（岩手／宮城／福島）の地産品販売も実施しました。

物販出展：宮城ふるさとプラザ COCO MIYAGI
日本橋ふくしま館 MIDETTE
株式会社キスケエクスプレス







広報活動

主なメディアリスト

メディア媒体	掲載・放送日	媒体会社（発行者）	掲載媒体・放送チャンネル・Webサイト名
TV	8月6日	TBS	はやドキ!
	8月6日	日テレ	ZIP!
	8月6日	フジテレビ	ノンストップ!
	8月6日	TBS	Nスタ
新聞	8月1日	フジサンケイビジネスアイ	
	8月6日	スポーツ報知	
	8月6日	デイリースポーツ	
	8月6日	日刊スポーツ	
	8月7日	福島民報	
月刊誌	7月	MICE7月号	
Web関連	8月5日	MANTAN WEB	WEB
	8月5日	Yahoo!ニュース	WEB
	8月5日	マイナビニュース	WEB
	8月5日	毎日新聞WEB	WEB
	8月5日	エンタメウィーク	WEB
	8月5日	MY J:COMニュース	WEB
	8月5日	So-netニュース	WEB
	8月5日	エンタメポスト	WEB
	8月5日	LINEニュース	WEB
	8月5日	RBBTODAY	WEB
	8月5日	BIGLOBEニュース	WEB
	8月5日	楽天infoseekニュース	WEB
	8月5日	楽天WOMANinfoseekニュース	WEB
	8月5日	mixiニュース	WEB
	8月5日	LINEニュース	WEB
	8月5日	デイリースポーツ	WEB
	8月5日	Yahoo!ニュース	WEB
	8月5日	msnニュース	WEB
	8月5日	livedoorニュース	WEB
	8月5日	dmenuニュース	WEB
	8月5日	gooニュース	WEB
	8月5日	モバゲーニュース	WEB
	8月5日	LINEニュース	WEB
	8月6日	デイリースポーツ	WEB
ラジオ	8月12日、13日	TOKYO FM (JFN) ONE MORNING LOVE&HOPE	ONE MORNING LOVE&HOPE

交通広告

○ポスター掲出・チラシ設置		
みずほ銀行	ポスター掲出・チラシ設置	都内各店舗
東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）	ポスター掲出	東京・渋谷・品川・上野・池袋・新宿
東京地下鉄株式会社（東京メトロ）	ポスター掲出	各線全駅
株式会社ゆりかもめ	ポスター掲出・チラシ設置	東京ビッグサイト・豊洲など
東京臨海高速鉄道株式会社（りんかい線）	ポスター掲出・チラシ設置	大井町・国際展示場・木場など
○その他		
新宿駅西口デジタルサイネージ		
都庁内 都政情報案内		
東京ビッグサイト内デジタルサイネージ		

クリッピング・掲出写真



公式印刷物



ポスター(A1)



チラシ



プログラム・会場案内

集合写真

参加学生[282名]

東北：156名／東京：120名／海外：6名

参加学校

岩手：宮古市立第一中学校・釜石市立釜石中学校・釜石市立釜石東中学校・岩手県立釜石商工高等学校・
岩手県立北上翔南高等学校　他

宮城：仙台市立仙台青陵中等教育学校・学校法人南光学園東北高等学校・宮城県立多賀城高等学校・
東北福祉大学　他

福島：福島県立新地高等学校・福島県立会津農林高等学校・星槎国際高等学校　他

東京：調布市立第五中学校・都立東高等学校・かえつ有明中高等学校　他

ボランティア：武蔵野大学・早稲田大学・Support Our Kids

報告書制作協力

武蔵野大学：藤村光マリサ、アイトジャノパディアナ、来住野竜也、三田麻結佳、王淑萍

早稲田大学：相川悠人、池田葵、瓜生千晴、小林和香子、樋山綾、吉田舞優、脇舛美菜、神丸真貴人
胡聡、志村かおり、仲原菜月、笠松真優

STAND UP SUMMIT 2019

2019.08.06　in TOKYO BIG SIGHT